

# 仏教文化公開講座講演録要旨

## 平安時代の阿弥陀仏信仰

梯 信 暁

はじめに

皆さん、こんにちは。梯です。本日は京都女子大学に呼んでいただき、本当にどうもありがとうございます。「平安時代の阿弥陀仏信仰」という、とても大雑把なタイトルを掲げました。

本題に入る前に、日本に阿弥陀仏信仰が伝来したあたりのことについて少し申し上げます。この写真は、敦煌の莫高窟<sup>ぼこうくつ</sup>の壁画で、阿弥陀浄土が描かれています。成立年代がはっきりしていて、貞観十六年（六四二）です。六四二年というと、日本では大化の改新もまだ起こっていませんし、中国仏教の立役者となる玄奘三蔵はまだインドにいて、サルやカッパと過ごしていた頃です。しかし中国の西の玄関口である敦煌には、こんな美しい極楽浄土図が

伝わっていたのです。

中尊は阿弥陀様です。結跏趺坐けっかふざの姿で、少し見えにくいですが、両手は胸の前に置かれています。阿弥陀様は大體、親指と人差し指で輪をつくっていらつしやることが多いのですが、この図では、その両手を胸の前に置く「說法印」と呼ばれる形をとられています。說法をなさっている姿です。

そしてこちらから見て右側が觀音菩薩、左側が勢至菩薩です。無数の菩薩が描かれていて、前は池の情景です。沐浴の池です。インドのお寺では、お堂の前に人工の池が造られていて、そこで身を清めてからお堂に上がります。これは中国風の絵図ですので、池の辺には欄干が施されています。全体が青っぽいのは水の色です。

池には、たくさんれんげしよの蓮華化生が描かれています。極樂への往生者の姿が表現されているのです。蓮華のつぼみの中に包まれて、娑婆から極樂へやって来て、極樂の池に着いたら花が開きます。無数に描かれた蓮華のつぼみの中に小さな菩薩の姿が描かれています。

これが、七世紀の東アジア全域に広がった、典型的な極樂浄土の情景なのです。幾つの特徴があります。一つ目は中尊が阿弥陀三尊であること、二つ目は阿弥陀様が說法印の坐像であること、三つ目はたくさんれんげしよの建物たけものが描かれていること、四つ目は無数の菩薩が描かれていること、五つ目は池の中に蓮華化生が描かれていること。今適当に言っただけで五つの特徴が出てきましたが、この五つの特徴をおぼえておいて下さい。次に七世紀以降の日本の浄土図をいくつか見ていただきます。

これは法隆寺金堂内側の壁画、西側の壁です。七世紀の作品ですが、ご承知のように元の絵は昭和二十四年の火事で焼けてしまいました。これは模写です。阿弥陀様は、やはり說法印の坐像です。右側が觀音菩薩、左側が勢至菩薩です。上のほうには天蓋が描いてあります。よく見えませんが、前方には蓮華化生が描かれているそうです。

建物も菩薩もたくさん描かれていて、敦煌莫高窟の壁画と大体同じような構図です。

次の図は、元興寺の智光曼荼羅ちこうまんだらです。元興寺の現在のご本尊は十五世紀末のものですが、もとは智光という奈良時代の僧が感得したとされる絵図で、八世紀には元興寺にあったことが分かっています。やはり莫高窟と同じ構図です。

このあたりで時間を取っていると、奈良時代だけで終わってしまいそうですが、曼荼羅をもう一つ御覧ください。これは當麻曼荼羅たいまんだらです。これは文亀本、室町時代の写本ですが、元興寺には奈良時代のものも伝わっていて、「国宝本」と呼ばれています。かなりすり切れていますが、全体の構図はなんとなくわかります。やはり莫高窟とほぼ同じです。

これは法隆寺に伝わっている「橘三千代念持仏」と呼ばれている阿弥陀三尊像です。今、法隆寺の大宝蔵院に常設展示されていますので、ぜひ見てください。蓮池のレリーフが丁寧に刻まれていて非常に美しいです。池から三本の蓮華がよつきりと出ていて、中央の蓮華上に阿弥陀様が坐り、観音勢至二菩薩は立っていらっしやいます。この阿弥陀様は、施無畏せむい与願印よがんいんです。橘三千代がいつも拜んでいた阿弥陀様です。橘三千代は藤原不比等の妻で、そのお嬢様が光明皇后です。聖武天皇の皇后です。

今年の大河ドラマでは、これから一条天皇の中宮彰子が大活躍します。彰子は藤原家のゴッドマザーだと言われますが、私はもう少し前の光明皇后が、第一のゴッドマザーだと思っています。光明皇后が阿弥陀仏を信仰していたことは有名です。藤原家にはこの後ずっと、阿弥陀仏信仰が伝わっていきますが、その淵源は、橘三千代・光明皇后の母子だったと言えるのです。

## 一 貴族社会における阿弥陀仏信仰の興隆

光明皇后の阿弥陀仏信仰は、摂関家に代々受け継がれていって、十世紀になると史料に顕著になってきます。いよいよ今日のレジュメのトップに挙げた、藤原忠平（八八〇〜九四九）をご紹介します。

忠平は基経の四男です。今回、私は結構マニアックな藤原家の系図を作りました。御覧下さい。冬嗣、良房、基経と続いて、基経の子が時平と忠平です。時平は菅原道真を九州へ流したことで早く亡くなったと言われます。その後、忠平が氏長者になり、やがて朱雀天皇の摂政、関白となっていきます。

朱雀天皇の母は穩子です。忠平の妹にあたります。この辺りから摂関家と天皇家は姻戚関係を継続するようになります。朱雀天皇の父は醍醐天皇で、醍醐天皇の母は胤子です。私は胤子を家系図の一番上に書きました。その前の宇多天皇の妃です。宇多天皇の母は班子女王、皇室の方です。その次の醍醐天皇から朱雀天皇、村上天皇、冷泉天皇、円融天皇、花山天皇、一条天皇、三条天皇、後一条天皇、後朱雀天皇、後冷泉天皇まで、母は藤原家の方です。次の後三条天皇の即位によって、時代が変わります。醍醐天皇から後冷泉天皇までは、藤原氏が外戚の地位を守り続け、それによって権力の頂点に居続けました。後三条天皇が即位したことによって、摂関家は外戚の地位を失い、ここで時代が変わります。とてもプライベートなことが時代の変わり目の原因になったのです。

それはそうとして、この間、権力の最高位にあった摂関家に、阿弥陀仏信仰が代々傳承されていきました。それが日本の阿弥陀仏信仰に非常に大きな影響を与えることとなります。たった一つの家、あるいはたった一人の人物が、社会全体に大きな影響を与えた。平安時代にはそんなことがたくさんあります。

では忠平を見ていきます。忠平には『貞信公記』という日記が伝わっています。『貞信公記』の中に、忠平の阿弥陀仏信仰に関する記事を見つけたのは、井上光貞先生です。井上先生は、『日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、一九五六年、一九七五年新訂）という、私たちにっては聖典のような本を著された方です。その本の中で、忠平の具体的な信仰を読み取ることのできる史料を指摘されました。それは『貞信公記』天慶八年（九四五）七月十八日条の記事です。天慶八年というと、忠平が亡くなる四年前です。彼はこの頃から体調を崩し、関白の辞表を何度も提出しています。でも結局許されず、忠平は死ぬまで関白でした。つらかったらうと思います。そんな中、天慶八年七月十八日に、山階寺（興福寺）から「九品往生図」を借り出してきたという記事があることに、井上先生は着目されました。こういう記事に注目することがすごいセンスだと思います。さらに井上先生は、同じ年の九月二十二日に、その絵図を模写させ始めたという記事を見つけられました。

忠平はその当時、京都に法性寺を造営中でした。「九品往生図」は法性寺の阿弥陀堂内の壁画制作のための参考資料だったと思われます。この行動によって忠平の具体的な阿弥陀仏信仰の内容が分かります。それは何かというと、「臨終来迎信仰」、お迎えの信仰です。「九品往生図」とは来迎図のことだと思います。

平安中期以降、阿弥陀堂の内壁には来迎図を描くことがスタンダードになります。代表的な作品が平等院鳳凰堂の扉絵です。これは日本に現存する最古の来迎図です。一〇五三年の作品ですから、今から千年近く前の作品が残っているということなのです。

忠平が来迎図を描かせたのは、それよりも百年以上も前のことです。実物は残っていませんが、このことから忠平がお迎えの信仰を持っていたことがわかります。

皆さんは「お迎え」という言葉を使いますか。今日参加している皆さんの年齢層だったら多分通じると思います

が、学生さんたちにはよくわからないようです。彼らは「お迎え」というと、お母さんが幼稚園に傘を持ってお迎えに行くというほうの「お迎え」を連想するらしいです。

しかし本来「お迎え」とは、臨終の時に阿弥陀様が極楽からお迎えにやってくることを言います。それが願うのが臨終来迎信仰、お迎えの信仰です。せっかく千年間も伝承してきた言葉の意味をここで失うのはとても悔しくて、『お迎えの信仰―往生伝を読む』（法蔵館、二〇二〇年）という本を書きました。「お迎え」という言葉を後世に語り継いでもらいたいと願っています。

日本人は、極楽から阿弥陀様がお迎えにやってくるという信仰を千年以上も持ち続けてきました。しかし親鸞聖人は、それを否定されています。親鸞聖人は、「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」と、すごいことをおっしゃったのです。これがどれほどすごいことなのかについては、またあらためて話さなければなりません。浄土真宗は臨終来迎を願いません。これは徹底しています。

浄土真宗以外の多くの宗派では、臨終に阿弥陀様がお迎えにきてくださることを期待するという信仰が現存しています。お迎えの信仰は千年間消えませんでした。親鸞聖人が否定しても消えませんでした。それぐらい根強い信仰です。

忠平の『貞信公記』は、貴族社会における臨終来迎信仰の存在を捉えることができる最初の史料です。史料がなくても臨終来迎信仰があった可能性はいくらでもあります。しかし、史料があるところまでしか追いかけれないのが歴史学の限界です。これは辛抱してもらわなければなりません。少なくとも忠平には臨終来迎信仰があったということです。それがいったいどこから来たのかは、のちほど説明します。

次に、藤原師輔（九〇八〜九六〇）を紹介します。忠平の子です。師輔には実頼という兄がいました。朝廷での

位は、師輔よりも実頼のほうが常に上です。師輔が右大臣のときには、実頼は左大臣です。さらに、実頼は摂政、関白になっていきます。しかし、師輔の子が兼家、兼家の子が道長、道長の子が頼通と、摂関家の主流は師輔の系統が伝承していきます。それはなぜかというと、師輔の娘の安子が村上天皇の妃になり、冷泉天皇と円融天皇という二帝の母になったからです。二人の天皇の外祖父になった師輔が最高権力者になったのです。

師輔は、比叡山の良源と強い関係を結びます。これを「師檀しだん関係」と言います。これは歴史学の先生が使う言葉ですが、師檀とは師匠と檀那だんなを言います。檀那はスポンサーです。つまり、先生とその先生の活動を支える経済的支援者です。貴族と僧の強固な関係です。

良源は大変な傑物です。名前は皆さんも知っていると思います。天台座主から大僧正になる人です。今は結構たくさんの大僧正がいらっしやいますが、良源が大僧正になったときはそうではありません。これは特別の待遇でした。良源は日本で二人目の大僧正なのです。一人目は奈良時代の行基菩薩です。行基は、聖武天皇が大仏を建立するために大僧正に任命されました。そこから二百年間、大僧正はいませんでした。二百年ぶりの大僧正だったので。仏教界の最高権力者と政府の最高権力者が、師檀関係を結んだのです。

良源を師輔の師匠に選んだのは、父の忠平だったと思われる。良源の伝記によると、興福寺の維摩ゆいま会えに良源が出仕したときに、論義ろんぎで大変な才覚を發揮しました。そのうわさを聞いて忠平は早速、良源を呼び出したのですが、そのとき良源はまだ二十六歳でした。その二十六歳の良源に忠平は、「私の菩提ぼだいを弔なぐさってくれ」と依頼したそうです。これはちょっと疑わしいと思います。大体、私は何でも疑ってかかる人間ですが、二十六歳の若造に、「菩提を弔ってくれ」などと言っただろうかと思ってしまうのです。「菩提を弔ってくれ」というのは、「私の葬式をやってくれ」ということです。このあと紹介しますが、実は、忠平には延昌と言う師匠が付いています。当時延昌は天台座主で

した。この師匠を差し置いて二十六歳の良源に、「私の葬式をやってくれ」とは言えないと思います。はたして忠平の葬儀に当たって、大導師を勤めたのは延昌です。良源は、その葬儀に出仕さえしていません。

ここからは私の想像、小説レベルのお話です。忠平は二十六歳の良源に、「うちの息子をよろしく頼む」と言ったのではないかと思います。これは思うだけで証拠がないので、論文に書けませんが、講演会ではべらべらと話しています。忠平は、良源を自分の息子の師匠にしようと考えたのだと思います。ですから、良源と師輔の関係は、父の忠平がセッティングをした盤石の師檀関係だったと思うのです。

師輔は父からお迎えの信仰を受け継いでいたはずですが、その証拠が『九品往生義』くほんおうじょうぎという書物です。これは現存している良源の書です。

『九品往生義』が良源の著述であるということを認めない先生がいらつしゃいます。それはなぜかというところ、良源の学問上の一番弟子の源信が『九品往生義』を知らなかったからです。一番弟子に見せないような本があるのかということですが、でも、私はそうは思いません。これは良源の書だと考えています。『九品往生義』は、『観無量寿経』「九品往生段」の講義ノートです。お迎えの信仰の根拠になる経文の註釈をした書なのです。『観無量寿経』全体ではなくて、「九品往生段」だけを引っ張り出してきて注釈したのは、お迎えの信仰に特化した書だったからだと思います。お迎えの信仰に関する講義が師輔に対して行われた、その講義ノートが『九品往生義』であり、この書は撰閲家に秘蔵されたのではないかと思うのです。

『九品往生義』が世に初めて出るのは、延久三年（一一〇七）に作られた『安養集』あんじょうしゅうという本で、この本は平等院で作られています（梯信暁『源隆国編 安養集の研究』法藏館、二〇二四年）。平等院は撰閲家の本拠地です。創建者の頼通のお膝元で、その側近の源隆国みなもとのかくにが比叡山の学者と共に編纂した書です。延久三年ということは、良

源が亡くなって百年足らずです。その中に一ヶ所だけ、『九品往生義』が引用されています。「九品往生義、大僧正いわく」と書いてあります。この時代は、大僧正といえは良源を指しますから、間違いない良源のものとして平等院には伝わっていた本だということがわかります。良源がこのような本を書いたのは、良源には、師輔のお迎えの信仰を導いていくという使命があったからだと思います。

次に藤原道長（九六六―一〇二七）を見ていきましょう。道長の父は兼家です。兼家は、父師輔の後を承けて、良源の活動を支えました。良源は永観三年（九八五）に亡くなるので、道長の活躍期には良源は既にいません。道長の臨終の師匠となったのは、院源という人です。院源も天台座主です。道長の臨終の作法を指導しています。レジュメに史料として『栄花物語』巻三十「つるのはやし」の記事を挙げています。現代語訳しています。

（道長は）ただひたすら臨終の念仏のことだけを考え続けられた。仏の姿以外のものは何も見ない、仏の教え意外の声は何も聞かない、来世のこと以外は何も考えないと心に決めて、目には阿弥陀如来の姿をご覧になり、耳にはかくも尊い念仏の声をお聞きになり、心には極楽のことを思い浮かべられ、手に阿弥陀如来の手から垂らした糸を引き、枕を北に顔を西に向けて横になられた。

『往生要集』の記述と符号します。道長は『往生要集』を愛読したということです。とても難しい本ですが、彼ぐらいの教養があればつるつると読めたでしょう。道長の阿弥陀仏信仰の教理的情報源は、源信の『往生要集』でした。道長は院源の指導のもと、『往生要集』の教えに従って、「臨終行儀りんじゆうぎょうぎ」を行ったのです。

— その子が、藤原頼通（九九二―一〇七四）です。平等院阿弥陀堂（鳳凰堂）を造った人です。あの辺りは藤原撰

関家の別荘地で、風光明媚の地です。今でもそうですよね。本当に美しい土地です。もともとは道長の別荘だった所を、頼通がもらい受けてお寺に改造し、このように壮麗な阿弥陀堂を建てたのです。最初にご紹介した極楽浄土の風景を思い出してください。このお寺の構造とびつたりと一致するでしょう。それで平等院は、この世の極楽と評されたのです。

次の写真は平等院阿弥陀堂の内部です。下のほうから撮っています。阿弥陀様の前に布団を敷いて、頼通が横になり、臨終行儀を行いました。中尊の阿弥陀様は坐像で、手は定印です。禪定に入られている姿です。密教の曼荼羅に描かれている阿弥陀様です。でも臨終の頼通の気持ちとしては、この阿弥陀様は、極楽からお迎えに来て下さったと見ていたに違いありません。これがお迎えの情景だと考えると、雲中供養菩薩は来迎の菩薩です。

よく似た構図がこれ、高野山有志八幡講蔵聖衆来迎図です。日本で一番絢爛豪華な来迎図です。上品上生の来迎図だと考えています。みんな雲に乗ってやってきます。平等院の雲中供養菩薩と同じような形で、楽器を奏でています。フルオーケストラです。こちらの阿弥陀様も坐像ですが、手は来迎印で、お迎えの姿をしています。そして、観音様は蓮台をささげています。

それを立体的にすると、こうなります。これは大原三千院往生極楽院の阿弥陀三尊です。阿弥陀様は坐っています。坐っていますが、来迎印です。こちらから見て右側の観音様は、膝立ちで蓮台をささげ持っています。これもお迎えの姿です。先ほどの来迎図と同じような構図です。

## 二 比叡山の念仏法会

資料二ページ目です。撰閲家に伝わるお迎えの信仰は、いったい誰が伝えたのかを考えていきます。それは比叡山の僧だと、私は考えています。

まず伝教大師最澄のお弟子で、慈覚大師円仁（七九四〜八六四）という方から見ていきます。比叡山で本格的に阿弥陀念仏を始めたのは、円仁だと思われれます。

円仁は中国で密教を学んできましたが、密教以外にも、実にさまざまな仏教法会を日本にもたらしました。その一つが念仏でした。阿弥陀念仏です。阿弥陀念仏の修業は天台宗にもともとありましたが、最澄の時代にはあまり盛んではありませんでした。円仁が中国で学んできた阿弥陀念仏が比叡山に定着したと見て良いでしょう。

それは「不断念仏」という行事で、今も行われています。史料として、源為憲の『三宝絵詞』をご紹介します。巻下「比叡不断念仏」の記事です。

念仏の法会は慈覚大師が中国から伝えたもので、わが国では貞観七年に初めて行われた。天台宗の四種の実践の中では、常行三昧にあたる。八月半ばの涼風の中、中秋の明月を挟む十一日の朝から十七日の夜まで、絶えることなく修行し続けるのである。…体は常に仏像の周りを歩き続ける。すると身業の罪が消えていくだろう。口には常に経を唱える。すると口業の罪が消えていくだろう。心には常に仏の姿を思い浮かべると意業の罪が消えていくだろう。

現在比叡山には、西塔の釈迦堂へ行く途中に「にない堂」と呼ばれる二棟続きのお堂があります。この写真です。この間を通り抜けて向こう側に、これは釈迦堂の屋根ですが、通り抜けて釈迦堂へ行きます。右側が法華堂、左側が常行堂です。この二つのお堂で比叡山の基本的な修行が行われています。今も行われています。念仏は常行堂で行われています。私が撮った写真に、「ただ今、にない堂では常行三昧の修行中ですので立ち入りをお断り致します」と書いてあります。「静かにせよ」ということです。

比叡山に常行堂が整備されていくのは、円仁が念仏を伝えた後のことです。にない堂は、文禄四年（一五九五）に再建されたものです。比叡山は織田信長に焼き尽くされましたので、古いお堂はほとんど残っていません。現存最古の常行堂は、加古川市の鶴林寺の常行堂です。平安時代末のもので重要文化財に指定されています。右側は姫路市の書写山圓教寺の常行堂です。これも重要文化財です。大きな常行堂で、この前の庭でトム・クルーズと渡辺謙がチャンバラをやったというので有名な所です。

これは、紅葉がとても美しい多武峯談山神社です。これは「権殿」と呼ばれている社殿ですが、実は元・常行堂です。九七〇年に創建されました。現在のお堂は十六世紀のものです。

さて、さきほどご紹介した源為憲の『三宝絵詞』の記事について説明します。『三宝絵詞』は永観二年（九八四）の成立で、当時仏門にあった冷泉天皇の第二皇女尊子内親王に献上された書です。不断念仏が初めて行われた貞観七年から数えると百二十年ぐらい後の史料ですので、さほど信憑性は高くありませんが、ほかにないのでこれを使います。

円仁が中国から伝えた阿弥陀念仏の修行が、年中行事として行われるようになったのは、貞観七年（八六五）のことです。この年は円仁が亡くなった年の翌年です。つまり、円仁の弟子が、師匠の遺命を承けて、念仏を年中行

事にしたということです。それが比叡山の不断念仏です。

四種三昧の中、常行三昧に当たるといことは、天台宗の阿弥陀念仏の修行として行われたということです。八月十五日の中秋の名月を挟む七日間に行われたと書かれています。今の暦だと大体九月下旬から十月上旬です。今年暑かったですが、比叡山では一番良い季節だと思えます。身は仏像の周りを常に歩き続けます。行道です。口には常に経を唱えとありますが、実際には「南無阿弥陀仏」の称名念仏が中心です。心の中には仏の姿を思い浮かべます。身口意の三業全てを傾けて行う修行です。

ただし期間は一週間です。本来、天台大師が制定した常行三昧は九十日の修行です。これは命がけの荒行です。それを一週間に縮めて、年中行事として行うことになったのです。これに貴族たちが注目するようになります。

比叡山の念仏については、昔からたくさんの研究がありましたが、念仏がどうして貴族の注目を浴びたのかという点がなかなか理解しにくいです。塚本善隆先生や藺田香融先生は、比叡山の念仏は「五会念仏」という法会ほうえの様式を取り入れたものであるとおっしゃっています。五種類のリズムとメロディーで構成された音楽に乗せて、歌うように称える念仏ととの法会だったということです。貴族達は、その美しい歌声に魅せられたのです。なるほどと思います。貴族たちは美しいものが大好きですから。

声に加えて、姿の美しさも重要ではなかったかと思えます。藤原道長が私邸の隣に法成寺という巨大な寺院を造営したことは有名です。その途上、治安元年（一〇二二）に正室倫子発願の西北院が完成した時、落慶法要として三日三夜の不断念仏が勤修されています。その法要に出仕したのは、延暦寺や園城寺から招かれた十二〜十五歳の貴族出身の沙弥だったということです。『栄花物語』によりますと、美しい装束を身につけた少年僧侶たちの姿は地蔵菩薩のようであり、その澄んだ念仏の声は迦陵頻伽のようだと書かれています。

平安時代の貴族は、「念仏」とは、「南無阿弥陀仏」と称えられている声を耳から聞くものだと理解していたようです。研究者の多くは、平安期天台宗の念仏は観想念仏が中心であると考えています。確かに念仏行者が目指したのは観想念仏の成就であり、平安後期には観心念仏の修行が主流となります。ただしそれは修行僧の念仏であり、私は、十世紀の貴族社会に広まった念仏は称名念仏が中心だったと考えています。

貴族たちは、京都の私邸に僧侶を招いて念仏の法会を催すこともありました。藤原実資の『小右記』には、道兼邸で行われた不断念仏に参集して、皆で「御念仏を聴聞」したという記事があります。「聴聞」という言葉から考えて、彼らにとって念仏は、耳から法楽を得る行事だったことが知られます。つまり貴族社会において「念仏」は、称名念仏を意味する言葉だったと考えられるのです。

### 三 不断念仏の流伝

次のページを御覧ください。不断念仏の指導にあたった人々を紹介しています。遍照（八二六？～八九〇）、相応（八三一～九一八）、増命（八四三～九二七）、延昌（八八〇～九六四）と、みんな有名人です。

まず遍照は、円仁の弟子で、台密の伝承者です。東山花山元慶寺の開基です。花山法皇ゆかりの寺です。その初代座主が遍照で、仁和二年（八八六）にここで阿弥陀三昧を行っています。師匠から習った不断念仏です。

次に相応です。彼は回峰行の創始者です。京都の人は阿闍梨餅のパッケージで見ていると思います。あの回峰行を始めたのが相応で、無動寺の開基です。延喜三年（九〇三）に無動寺で不断念仏を行いました。また元慶七年（八八三）には、東塔虚空藏尾の常行堂を大講堂の裏手に移築しています。

次に増命です。増命は円珍の弟子で、西塔の造営に力を尽くした人です。寛平五年（八九三）に西塔に常行堂を建てています。延長五年（九二七）には、その常行堂の四面の壁に「極楽浄土図」を描いたという記録が残っています。『叡岳要記』『山門堂舎記』の記事によって知られます。これらの書については武覚超先生の詳しいご研究があります。

次が今日の結論に繋がる人物、延昌です。彼は第十五代の天台座主で、さきほど少し言及しましたが、藤原忠平の師匠です。家法阿闍梨かほうあじりを務めていました。

慶滋保胤よしずのすなねが書いた日本最初の往生伝『日本往生極楽記』の中に、延昌の伝が出ています。それによると、延昌は、臨終に不断念仏を行い、糸引きの臨終行儀を行っていることがわかります。糸引きというのは、仏様の手から糸を垂らし、その糸を握って死んでいくという作法です。臨終行儀を行った日本で最初の人が延昌です。史料でうかがい知られる最初の人です。

臨終行儀の作法は、源信の『往生要集』の中に詳しく書かれています。道長などはその記述に従って臨終行儀を行いました。『往生要集』の成立は寛和元年（九八五）です。延昌が亡くなるのは応和四年（九六四）です。ということは、延昌は、源信が臨終行儀を定める二十年も前に、糸引きの臨終行儀を行っていたのです。

臨終行儀を行っていることから、延昌にお迎えの信仰があったことは確かです。その信仰は忠平に伝えられたはずで、忠平が亡くなったのは天曆三年（九四九）です。延昌が亡くなる十五年前です。その時延昌は、忠平の臨終を導き、続いて葬儀の大導師を勤めたのです。

## おわりに

延昌から忠平に伝えられたお迎えの信仰が、その後の日本の阿弥陀仏信仰隆盛のきっかけとなった。私はそう考えています。摂関貴族は比叡山の僧侶の指導のもと、臨終の作法を行うことになり、それが代々継承されていきました。これによって阿弥陀仏信仰が貴族社会に定着し、やがて庶民の間にも広がっていったのです。

本日は、平安貴族の阿弥陀仏信仰と比叡山の念仏との関係について見てまいりました。十〜十一世紀、貴族社会の阿弥陀仏信仰を導いたのは、比叡山の僧侶たちでした。それによって貴族社会と強固な関係を結んだ比叡山延暦寺は、躍進を遂げ、興福寺とならぶ日本仏教の指導者の地位を獲得したと考えることができます。

本日はご縁をいただき、誠にありがとうございます。

(終了)

## 〈キーワード〉

藤原忠平 藤原師輔 延昌 良源 臨終来迎信仰 不断念仏